

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● ウズベキスタンの旅

2015年女房とウズベキスタンツアーに参加した。ウズベキスタン共和国は中央アジアに位置する内陸国家で、ソビエト連邦より1991年に独立した。

この国のサマルカンド、ブハラやヒヴァなどのイスラム建築群は、イランのイスファハーンと並び、世界で最も美しいイスラム建築や都市遺跡だと私は思う。

この国へは韓国・仁川空港より空路で首都タシケントに入り、そこから旅行会社がチャーターしたバスに乗り、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァをめぐるバスツアーで、9月25日まで、7日間の旅であった。

サマルカンドは、シルクロードの要衝として栄え、13世紀にモンゴル帝国に滅ぼされたが、14世紀末に登場した英雄ティムールによって復興を遂げた。

レギスタン広場は、青いタイルで飾られた3つのマドロサ(神学校)で囲まれている。1417年から建設され、世界遺産に登録された建築群である。

この地のビービーハーヌムモスクは1399年からティムールが建設した167m×109mの規模を誇る雄大で均整の取れたモスクである。

サマルカンドの市場は野菜や果物などの生鮮食品や生活物資が豊富に売られ、多くの市民が詰めかけ賑わっていた。市場は軽快な木造の柱・梁や屋根で構成されたシェルターであり広く開放的で、風通しが良い空間が印象に残った。

サマルカンドから西へ220km、ブハラに向かい、穀倉地帯をバスは走った。陽気な女性ガイドさんは柔道の試合に出たため日本に来たという。

ブハラは古代からサマルカンドと並ぶオアシス都市。サマン朝の首都で、ユネスコ世界遺産に登録された美しい遺跡群で構成される。

アルク(城塞)は、古代ブハラの時代から20世紀初頭まで君主の居城として使用してきた。

日干し煉瓦で構成される雄大な城壁は、モンゴル帝国襲来により多くが破壊されたが、現在のアルク城に近いものは18世紀ブハラハーン国マンギト朝時代に建造された。

その後1920年のソ連軍の攻撃によりブハラハーン国は滅亡した。その際に城の7~8割が崩壊し、現存するものは、その後改修された部分である。

イスマイル・サマーニ廟はイスラム初期の建築様式の靈廟で、892年~943年にかけて造られた中央アジアに現存する最古のイスラム建築である。

9世紀終わりにブハラを占領して都としたサマーニ朝



サマルカンドのレギスタン広場
3つのメドレッセ(神学校)が向かい合う。



煉瓦で作られた雄大なブハラのアルク城壁

のイスマイル・サマニが父親のために建てた靈廟だが、後になって彼も、息子も葬られてサマン朝の王族の靈廟となつた。

モンゴルによって街が破壊し尽くされたとき、ほとんどが砂の中に埋まつていて、破壊を免れたといわれる。砂の中から廟が掘り起こされ、再発見されたのは、1925年の発掘によるといわれる。

レンガを積み重ねた壁面に丸ドームを乗せただけの単純な構造だが、入念に積み重ねられたレンガは様々な模様を形作り、また日差しの加減によっても様々な表情を見せる。

ブハラのカラーン・モスクは13世紀、モンゴル来襲で破壊され、現在の物は16世紀にたてられた。

1万人の信者が同時に礼拝できるモスクで、1970年代より補修が進められ、独立後再びモスクとして利用されている。塔の高さは45.6m。基部の直径は9m、地下10mの深さに埋め込まれていて、上部の最も細い部分の直径は6mと言われる。

ヒヴァは16世紀から20世紀初頭まで存在したヒヴァハン国(ウズベキスタン)の首都であった。

イチャンカラは東西約450m、南北約650m、城壁の高さは7~8m、基部の厚さは5~6m、全長2.2km、26haであり、アルク(城郭)、20のマドロサ(神学校)、20のモスク、6基のミナレット、マスジッド(靈廟)など50以上の歴史的建造物と250以上の古い住居で構成される。

私は西欧のキリスト教世界の建築より、イランやインドのラジャスタン州、ウズベキスタンなどイスラム建築の方が好きである。まだ見ていないイスラムの名建築はスペインのアルハンブラ宮殿である。

みき・てつ

専共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。

URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。

建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかつた時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。